TKT 国際交流通信 登美高

第５号

奈良県立登美ケ丘高校
国際教育部　編集
2019年10月発行

英語の入試はどうかわるのか？

2020年度からの大学入試、その中でも英語の入試方法についてはいろいろな情報が錯綜していますね。各大学はどのような‘新しい’タイプの試験を実施してくるのでしょうか。

昨年度の東京大学の英語問題で面白いものがありました。自由英作文で「祝日の提案」です。あなたならどのような祝日を提案しますか。現代社会やこれまでの歴史を鑑みてオリジナルの祝日を、しかも英語で提案するとなると、英語力だけでなく社会の現状や歴史的なことについても知識が必要ですね。西洋ではクリスマスは家族団らんの日だそうですが、日本ではどうですか、「家族の日」のような日を作って1日ゆっくりと過ごすなんてどうでしょう。

これからは自分の知識を活用して自分の意見や考えをまとめ、発信していく力が必要とされるのかもしれません。みなさんは準備ＯＫでしょうか。

表札は日本だけ？ー文化の比較は面白いー

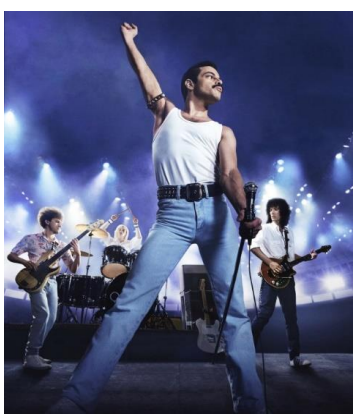
表札が普及しはじめたのは明治4年の戸籍法で、庶民が苗字を持つようになってからだそうです。しかしそれが一気に広がるきっかけとなったのは、1923年（大正12年）9月1日に起こった関東大震災、多くの家屋が倒壊し、同じ場所に家を再建できるとは限らなかったので、誰がどこに移転したのかわかるよう表札を利用しだしたそうです。

一方で、実は欧米には表札がありません。誰がどこに住んでいるのかは重要な個人情報と考えられていて、誰の家か一目でわかる表札は、わざわざ掲げません。アメリカやイギリスなどは、アベニューで住所が表記され、家の玄関にある番地と合わせればたやすく位置が特定できるからだそうです。

“Bohemian Rhapsody”〔ボヘミアン・ラプソディ〕を回想して

みなさんは、「ボヘミアン・ラプソディ」という映画を見ましたか。2018年に公開されて以来、全世界でメガヒットをもたらしました。「クィーン」という音楽メンバーの素晴らしさ、「キラー・クィーン」「ウィ ウィル ロックユー」や「ボヘミアン・ラプソディ」など、そのユニークな歌の数々はもとより、主人公のフレディ・マーキュリーの波瀾万丈な人生にも胸を打たれた人が多かったのではないでしょうか。この映画は音楽の素晴らしさだけではなく、家族（ファミリー）の大切さやLGBTQ（性の多様さ）をどのように受け止めたらいいのか、そして「エイズ」という伝染病に立ち向かった主人公の姿やそれに対して周りが暖かく支えていく様子など、見所がたくさんありました。これから観てみようと思っている人も多いかもしれませんが、私は主人公のフレディがエイズを発症しつつも、メンバーの協力を得て、最後にチャリティイベントの「ライブエイド」コンサートを立派に成功させる姿に感動しました。

さて先日、私はあるニュースが目に止まり、このフレディの姿がふと浮かびました。そのニュースは、「金属バット」というある芸人グループが「エイズ」をネタに差別的な表現を使って多くの視聴者から非難をあびているというものでした。詳しく述べるのは控えますが、彼らのネタは、「猿」や「黒人」という言葉を「エイズ」に関連づけて、エイズ患者や特定の人種を心なく軽蔑するものでした。これに対してHIV陽性者の当事者団体や支援団体は、「ショックというよりも呆れた」「差別や誤解を強化するのはやめてほしい」という批判のコメントを出しましたが、芸人としての自覚のなさと彼らのあまりにも他人事のような考え方や、無神経で恥ずかしい内容には、落胆と腹立たしい思いが残りました。



話はフレディのことに戻りますが、1991年に45歳で他界するまで、多くの友人が彼を支え、フレディの名を冠したエイズ患者支援基金『マーキュリー・フェニックス・トラスト』が後日、設立されたことをここに書き添えたいと思います。みなさんも興味があれば、ぜひ彼らの歌を聴いてみてください。

クイーン (Queen) は、イギリス・ロンドン出身の男性4人組ロックバンド。イギリス、アメリカ、日本をはじめ、1970年代を中心に、世界中で最も成功したバンドの一つ。これまでにアルバムなどのトータルセールスは1億7千万枚～3億枚とされ、「史上最も人気のある100のロックバンド」にて第3位になったそうです。 ちなみに1位は、ビートルズ、2位は、レッド・ツェッペリンだそうです。（インターネット ウィキペディアより）